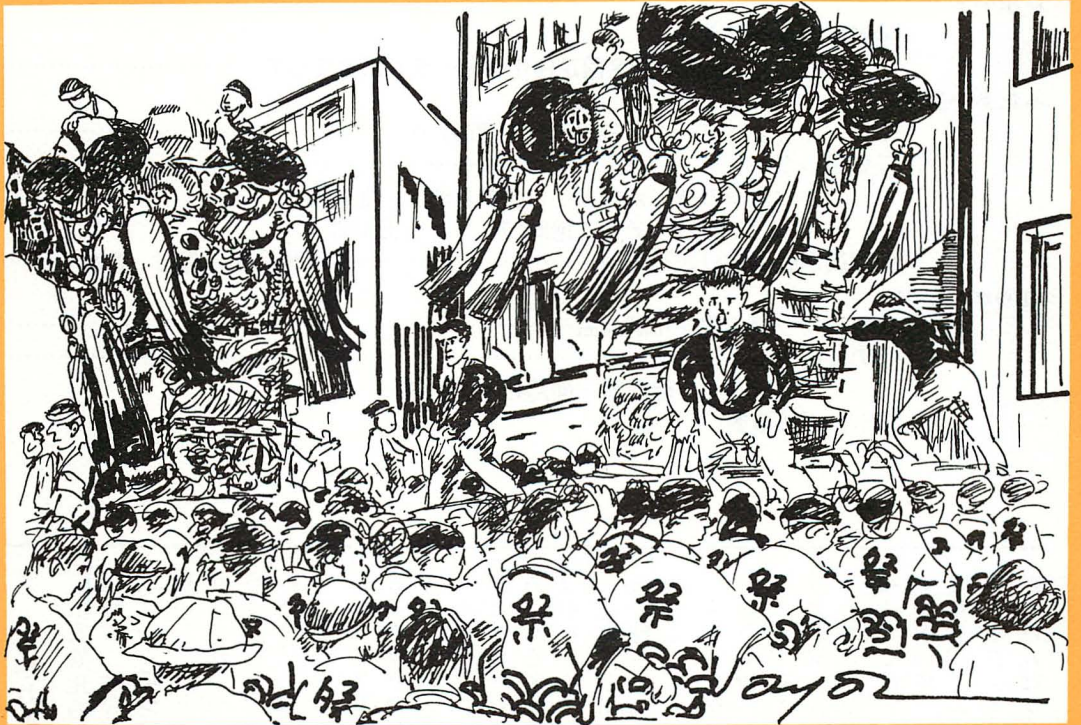


まちづくりネットワークえひめ

# 舞 とうん

VOL 37



新居浜 太鼓台

## 特 やさしさを探る 集

『ふれあいのなかから』

- 優しさの波紋
- 主人と二人三脚
- あじさいを愛でる
- やさしさ 本物の魅力
- 熱いエナジー

特 『やさしさを探る』 集

「ふれあいのなかから」

優しさの波紋.....宇和町/川中 一幸..... 2  
 主人と二人三脚.....中島町/小島 富子..... 4  
 あじさいを愛でる.....新宮村..... 6  
 やさしさ 本物の魅力.....松山市/片山 克..... 8  
 熱いエナジ.....伯方町/山岡美穂子.....10

えひめ地域づくり研究会議から

地域づくりのペースを求めて―管見スイスを歩いた2週間/見想録Ⅶ.....12

レポート

地域の未来を考える  
 ―第一回全国定住化フォーラムに参加して―.....14

ふれあい広場

リレーでちょっとーク(今治市・大洲市).....16  
 元気印レポート.....18  
 <風早の郷にまちおこしの熱き風 一北条市一>  
 <こだわり そして地域づくり 一玉川町一>  
 研究員活動を振り返って.....肱川町役場/富永 廣次.....22

Information

まちづくり草の根文化講演会.....23  
 媛のくにフラッシュ.....24  
 <日吉村・砥部町・面河村・城川町>  
 海への手紙事業

特集「やさしさを探る」  
今号のテーマ  
―ふれあいのなかから―

核家族化の進行やコミュニティ、「むら」社会の崩壊など地域社会を取り巻く環境は日本経済の発展に反比例し、ひとの「こころ」が置き去りにされつつ、経済優先の社会へと益々進行しているような気がしてならない。

「こころの豊さ」が叫ばれるようになって久しい今日、果たして、自分達の周りの何人の人がこのことを実感しているだろうか。

まちづくりの営みは、パノラマ展開と言われる。地域、自然、文化とあらゆる客体の様々な分野に関わりながら、そこに住む人たちが、地域にそして自分に誇りが持てる「こころの絆」を創っていくことが、「まちづくり」の基本であろう。

人が人に関わり、人と触れ合うことから本物の「やさしさ」が芽生える。今、そのような人に優しい地域社会が望まれている。

そこで、今回の特集『やさしさを探る』では、人と人との関わりに視点を置いて、県内各地の地域活動を取り上げてみました。

「やさしさ」再考の一助としていただければ幸いです。

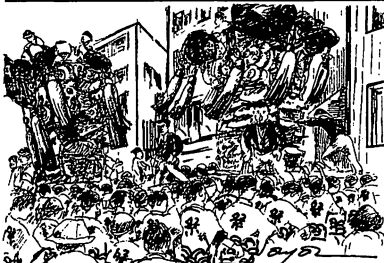
表紙の言葉

腹の底まで響くような太鼓の音に、思わずじっとしていられなくなる。

小学生の頃、一宮神社前に住んでいた私は、地区の太鼓台が勢揃いするのをいつも見ることでできた。魅せられて、その後何度も訪れている。

祭りが残る街はいいものだ。祭り一色、人の心も一つになる。今年も平和運行を願います。

柳原あや子



新居浜 太鼓台

愛媛経済同友会

代表幹事

大西 越 丙



一、コミュニティは今

“ふるさと”は、遠くに居ても、またそこで暮らしていても、ふるさとに抱く気持は本来同質のものであろう。

ところで、このふるさとを取り巻く環境はことのほか厳しい。物質優先の生活定着に加え、過疎化、

高齢化の進む中で、人々の絆の崩壊が指摘されて久しい。

それ故に各地では、有志が市町村行政とタイアップしてまちづくりに取り組んでおられ、それぞれに特性を活かしたまちづくりが進展していることは、心強い限りであると同時に関係者の労に敬服しているところである。

人々が、ふるさとをふるさととして自覚するものに、祭り・獅子舞・虫おくり・おこもり等といった年中行事や、小学校・自然・公園・神社仏閣・遺跡・各種施設等のシンボルのほか、ふるさとから生まれた伝説がある。更に加えるならば、健康づくり、安全対策、福祉活動、利便の確保、環境美化文化やスポーツの振興が挙げられよう。(このことは、愛媛県が昭和五十四年から五十九年にかけて発行した「ふるさとシリーズ」へ全五巻に詳しい)

これらをコミュニティの核として再認識して欲しいものである。

二、そしてコミュニティは今、  
今、四国は三橋の時代を目前に、

高速交通体系の整備が急ピッチで、これは四国が地理的隔離性を克服し、四国の自然や産業社会がその独自性と魅力を全国に向けて発揮できる新しい時代の到来である。

このことは、海や山による隔離性が消滅し、人々の行動が地理的距離よりも時間距離によって決定づけられることでもある。まさにボーダーレスの時代とも言えよう。

このことを念頭に、四国をリードする愛媛づくりに向けて、行政や経済界において各種のビジョンが策定されていることは、高承のとおりである。

このビジョンを根底で支える核が、俺がまちのコミュニティではないだろうか。高速道路で結ばれ、県内各都市から松山市まで一時間となる高速交通時代を先取りした地域づくりが急がれる。

コミュニティは何といつてもそこに住む人々によって支持され、自慢にされなければならない。自慢にする存在となつてこそ人々の絆が深まり、地域外の人々にも誇れるパワーとなるのではないか。

このことがとりもなおさず“住んでよかった俺がまち”の源泉と思えるのだが……。

とかく人々の結びつきの稀薄さが指摘される昨今、あらためてコミュニティへの想いを記した次第である。







## 優しさの波紋

宇和町 前希望の森園長  
川中 一幸



一筋の閑静な町に逢う。中心街を右へ。袋のように山沿いに点在する五つの集落。何時の頃からか、

神野久地区と呼んでいる。神領、別処、野田、小野田、久枝の一文字ずつをとった呼称のようである。少し歩くと、右手の小高く突き出た丘の上に、赤い屋根の「希望の森」が目に入る。昭和五十九年四月、精神薄弱者更生施設「希望の森」は、この地に誕生した。更に

歩を進めると、県立宇和養護学校がある。養護学校を卒業して、なお就職困難な人達の生活の場が希望の森である。

訓練をしての厚生が目的であるが、重度の知的障害者が多く、十年経った今も、社会復帰できた人はいない。年齢的には、二十歳から六十歳までの幅があり、二十六年の職員と共に一つの社会を構成

している。施設というと、どうしても隔離された感を持たざるを得ない。障害を持っている小さな生命とはいえ、社会の一員として、また、地域の中の希望の森として、魂のある施設づくりが目標である。そのためには、絶対的な条件の克服が必要である。

まず、障害を持っていると、確かに誰かの手を借りなければ生きてゆけないのは事実である。お世話の成りつ放しであれば、誰も希望の森が宇和にあつて良かったとは言つてくれない。たとえ僅かでも、お世話になった以上にお返しでき、喜んでもらえるような希望の森でありたいことを、最大の課題として歩んできたつもりである。

■茶畑をバックに、運動場に立つ。神野久地区の集落約三百戸の民家が、扇を広げ、田園を囲むように点在する。正確な名称は、「神野久地区新しい村づくり推進協議会」。こうした共同体の中で、宇和のトップを切つて、農業改善事業もやってきた実績が、現在にま

でその要因を保ってきたといった方が的確なのかも知れない。

■はじめの内は、遠くから眺めている状態であつた地域からの希望の森への距離は、時間と共に接近し、三年目にして、会則の中に希望の森という八十六名の集落が明記され、六集落となつたのである。集落意識の強かつた運動会も、「希望の森の参加により、和やかになつた」といわれる等、純粹にして無垢な障害者に応えていただいた地域の優しさに、唯々、感謝あるのみである。

毎年、正月明けに各集落持ち回りで総会が開かれる。平成元年の総会の席上、「この地区にも、新しい村おこしを」という声が、宿題として次期総会に持ち越された。かねてから「新しい村づくりは希望の森から」と意気込んでいただけに、幾度となく作戦



老人クラブとの交流茶摘み





## 一面にひろがる

### ひまわりの大輪

を練った。そして、総会の席上、希望の森の提案した「花のある美しい集落づくり」が、全員の賛同を得たのであった。忘れたかのようには青田の中に残された休耕田にひまわりをと、五月上旬、大粒の種子が全戸に配布された。希望の森でも、三反歩の休耕田に、老人クラブの協力を得て、初めて種子が播かれた。地域の優しさに育まれたひまわりは、炎天の七月下旬、大輪の花をつけ、予想以上の反響を呼ぶこととなった。そして、開花後初めてのひまわり油は、地域に配られ好評を博した。

休耕田にひまわりを植える運動は、宇和町全域に広がっていった。今では、例年五町歩余りのひまわりが、各所に大輪の花を見せ、春のレンゲと共に、名物のひとつとも言えるようになった。

こうした取り組みに呼応し、三年前、宇和町当局の尽力により、希望の森の一角に、ひまわり搾油所が完成した。苦勞の末、園生の作業指導の一環として取り上げ、特産品として売り出しているが、今では県外からも注文がくる程となった。春は「れんげ祭り」、そして今年初めて、希望の森周辺で、町主催により賑やかに「ひまわり祭り」が開催された。こうした時の流れの中で、今、ひまわり団地が造成中である。

小さな町に、花いっぱい運動を提唱して、もう八年になる。三月半ば、二千球のチューリップを無料で配布する。春を告げる「チューリップ祭り」は恒例となった。商店街には、希望の森で生まれた四季折々の花五百株が、花壇に植えられ、リースとして軒並みに飾るなど、年中花を見せてくれる。花づくり講習会には、有料に

もかかわらず、定員五十名を超える多くの人が希望の森に足を運ぶ。■「まちづくり」「むらおこし」と大上段に構える必要のない、新鮮な息吹を要求している社会を知った。わずかな発想の転換と、やれること、できることから、自己資源を生かし、出発し、実行することである。希望の森の生命は小さい。地域に息づく各種団体をワンクッションとすることにより、より大きな波紋を広げて行つた。今、希望の森を支えている諸団体は多い。神野久地区、役場、公民館、農協、商工会、森林組合、ライオンズクラブ、老人クラブ等々。多くの人たちに支えられながら、希望の森を拠点として広がる「優しさ」を中心とした福祉の波紋が、明日の宇和の姿であつて欲しい。

■喜んでもらえる所であれば、何



### 地方祭にも

参加積極

### 積極参加

処にでも出掛けようと約束して結成した和太鼓チーム「希望太鼓」の響きが、今、宇和の空にこだまする。障害者だけの和太鼓チームは、全国的にも珍しく、郷土芸能として定着し、町外からの依頼も多い。園生達は、ここにも新しい生きがいを見つけてきた。下積みにはされてきた長い人生の中で、一社会人として生きて行こうと懸命に努力している一人ひとりの目は輝いている。

希望太鼓の響きの中に、今年もまた、炎天の中、勇壮に大輪のひまわりが咲いた。希望の森で播いた優しさの種子が、宇和の風土の中に、どう根付き、どんな大輪を咲かせてくれるのか楽しみである。



希望太鼓



## 主人と二人三脚

### 里親体験記

中島町

小島富子

#### ◇取り組みの経過◇

私の生まれ育った野忽那島は周囲6km、人口三百五十人足らずの小さな島です。小学生の減少は著しく、私が子供の頃、百七十九人いた児童も昭和六十二年には七人になってしまいました。そこで、当時の校長先生が発起人となり、

「教育の島」と銘打って東奔西走され、学校と地域の方々の協力を得て、昭和六十三年度より野忽那小学校は、「瀬戸内シーサイド留学校」となりました。

当時は月一回以上の里親会が持たれ、地域の役職の方で組織する実行委員会は、今も続けられています。島巡り、夏休み体験入学、魚釣り大会、秋祭り、亥の子、もちつき大会、お年寄りとの交流会、ミカン狩り、秋季大運動会など地域とのふれあいを通して、留学生には島でしか出来ない生活をしながら貴重な体験をしていただき、地元の子供は、町の子供とのふれあいによって視野が広がり、良い刺激を受けています。

平成四年には、体育館（僻地集会所）や棧橋が新設され、島の活性化へとつながる一方、留学制度は順調に発展しています。

#### ◇里親の思い出◇

「私がお眠になった時、優しくネンネン子守り唄を歌ってきかせて下さった、本当に優しいお母さん」。どの子供にとっても、世界

中でお母さんほど良いものはないでしょう！そんな愛しい子供を数ある山村留学の中から、全国的にも珍しい「シーサイド留学校」のある野忽那島に、「留学させてみよう」「留学してみよう」と決心された勇氣ある親御さんと子供たちに「留学させて良かった」「留学して良かった」と思っ頂けるような里親になりたいと家族で話し合い、大切なお子さんを昭和六十三年度より預らせて頂いております。

最初の年は、女の子（四年生・大阪府）と男の子（六年生・伊予市、大阪府）で、二期から五年生の男の子（岡山市）も加わりました。日曜日のある早朝、校長先生と一緒に子供たちと船に揺られながらタチウオを釣りに行った時の朝日がきれいだったことや、お弁当とお菓子を持ってミカン狩りに行ったこと、家族で本を音読したこと、船での島一周や磯遊び、ホテル狩り、台風状況の観察などが、今、懐かしく甦ってきます。

二年目は、五年生の男の子二人

でしたが、勉強に運動に良く頑張ってくれました。この年、テレビ愛媛で「潮騒」を放映して頂きました。

三年目になると、神戸から六年生の男の子と四年生の女の子の兄妹が留学して来て、前年の男の子は二年留学することとなりました。毎日の宿題の本読みを実に上手に聞かせてくれたのが印象的です。

四年目は、神戸からの女の子が二年目を迎え、神戸で仲良しだったという同級生の女の子が、また砥部からは六年生の男の子が留学して来ました。手作りのお弁当を持ってとべ動物園へ行き、童心に帰った日が思い出されます。三期から大阪府の五年生の女の子も



伊予柑畑で



バムが、楽しかった日々を物語っています。

地元へ帰る二人の子供には、それぞれの地元で頑張っただけいし、二期期からも留学を続ける三人には、新しい里親の元で、今まで以上に頑張ってくれることを祈っています。

### ◇今後の展望◇

校長先生はじめ教職員の皆さんからは、子供たち一人ひとりの自主性を伸ばす教育を見せて頂き、そのご尽力には頭が下がりました。現在、里親は五軒ですが、今後

もっともっと増えることを願っています。健康を取り戻しましたら、また里親をさせて頂きたいと思っています。

今後「シーサイド留学」を持続するには、大変な努力がいるものと思います。全国から留学を希望してくる子供たちのためにも、みんなで知恵を出し合い、協力し合って「シーサイド留学」が増々発展しますことを願ってやみません。

留学生並びに留学生の親御さん！沢山の思い出をありがとうございました。

脳裏をかすめます。

六年目にな

ると、大阪府の女の子が三年目を迎え、他の二人の女の子が二年目となり、松山市から五年生の男の子が、また、千葉県からは六年生の女の子が留学して来て、大家族となりました。

### ◇ふれあいのアルバム◇

延べ二十二人の子供たちが、この五年四ヶ月の間ずっと続けてきたことは、親と子の文通です。これで離れて暮らす親と子の親密度がそれまで以上に深まったのは何よりであり、あまり好きでなかったお刺身などの海の幸が好物になっていく様は、見ていて楽しく思いました。男の子の丸刈り、一緒に入ったお風呂、楽しかった磯遊び、漢字の書き取りのテスト勉強、発表会や学芸会、運動会の練習、そして、私たちにすれば何よりも留学生の親御さんとお友達になれて、井の中から一歩出れたことが大きな財産となっています。このように、わが家の六冊のアル

### わが家の船に乗って



加わり、女の子が三人となり、今までと違った雰囲気です。主人共々楽しい日々を送りました。とりわけ印象に残っているのは、土曜日の夕方、砂浜を素足で散歩したり、ゲームをしたり、海に向かって大声で歌ったことです。夏休み中の島にいる十日間くらいは、一緒にラジオ体操をしたことも思い出します。

五年目は、神戸からの女の子が三年目に入り、大阪府からの女の子が二年目となり、NHKテレビの「島に瞳が輝く時」で全国放映されたことは、子供にとっても良い記念になったと思います。二期から、五年生の女の子二人（広島県・大阪府）が留学して来て、その時にNHKテレビの灰谷健次郎「島からの手紙」の中で、一部「シーサイド留学」を取り上げて頂いたことも懐かしく





あじさいを

愛でる

中野あじさいグループ  
(新宮村)

高速道路の開通を契機に、「四国で一番便利な村」をキャッチフレーズに新たな地域活性化への動きが顕著な新宮村を訪ねた。

新宮村は、愛媛県の最東端に位置し、高知県と徳島県に接する県境の山村。法皇山脈と四国山脈に

囲まれ、平地が少なく、集落は谷間に寄り添うように点在している。豊かな自然の中に高速道路という、二十一世紀に向けての愛媛を象徴するかのようなどころである。

今回、取材に訪れたのは、村の中心部から約4kmほど徳島県側へ入ったところの上山中野地区。戸数一八戸、地区住民六〇名ほどの県内の何処にでも見かけられるような小集落である。

中野あじさいグループの大西武会長さん宅では、会長ご夫妻と同グループの高橋小枝子さん、新宮村産業振興課の高橋幸正課長補佐さんが我々を待って下さっていた。今回の取材の目的は、地区を挙げてのあじさいづくりと、そこかしらひろがる「ひととのふれあい」によるまちづくりについて

をお尋ねするため。

■あじさいと歩む■

上山中野地区は、銅山川沿いの北側斜面に一八戸の民家が寄り添うように集まっている小さな集落である。コミュニティ

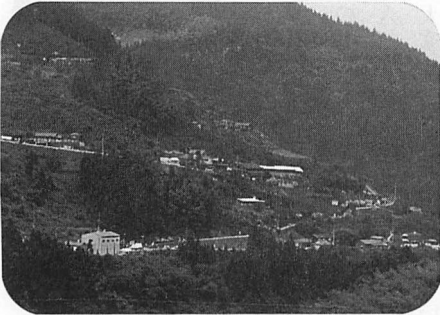
の崩壊が叫ばれる中で、元々、共同体意識というか助け合い精神の強い集落であったということである。

昭和五十一年、地区内を通る村道が全面改修された。

当時、生活改善グループの会長をしていた大西スミコさんが、道路の開通という喜びの気持ちを何か形にしたいと、隣の徳島県山城町から四五〇本のあじさいの苗木を分けてもらい、この道路沿いに植えたのが、現在の「あじさいロード」のスタート。

その後、生活改善グループの活動が停滞ぎみとなり、解散寸前となっていたころ、地域の連帯意識の強さにいち早く気付き、積極的に助言・協力をしてくれたのが、

- 当時の伊予三島農業改良普及所の福本蝶子所長さんであった。
- 株分けをしながら増



上山中野地区

やしていくなかで、女性だけの活動に限界が見えるようになり、福本所長の助言を得ながら、平成元年十月に「中野あじさいグループ」が結成された。もともと「住民が一緒になって」という素地のある地域ではあったが、グループ結成を契機に、より一層男性と女性が一体となつての活動が展開されるようになっていく。

同グループの構成員は、一八戸全てからの参加者（現在は、隣の集落からの参加者を含め、二〇戸四〇名）。この会員が、村道沿いのそれぞれの私有地にあじさいを植え、それぞれが刈り込みや周りの草刈りなど責任をもって管理していく。2kmに渡り整然と連なるあじさいの並木は、住民の方の統制なき自主管理の中から生まれたものなのだ。訪問当日は、開花時期を大分過ぎていたが、どのあじさいも来年の開花に備え、見事に刈り込みされていた。

大西会長さんによると、自主管理が原則ながらも、高齢者世帯のあじさいの手入れについては、会



雨にも負けず共同作業

員総出で手  
伝いをする  
のだという。  
連帯意識の  
強さと共に、  
その光景か  
らは何とも  
言えぬ「や  
さしさ」が

由かもしれない。  
平成元年、この地道なあじさい  
ロードの取組みが、初めて新聞で  
報道される。この記事がきっかけ  
となって、花の見頃になると、あ  
じさいロードには村外から多数の  
人たちがあじさいを觀賞にやって  
来るようになっていく。  
そして、平成二年には第一回目

テントの設営、接待の準備のほか、  
あじさいまつりのもう一つの名物  
「あじさい見だんご」づくりなど、  
老若男女まさに心を一つにしての  
準備が続く。そして、まつりの当  
日、車を降りた人たちの「ウ  
ワーッ」という歓声を聞くと、そ  
れまでの苦勞も一遍に吹き飛んで  
しまうそうである。

転出したひ  
とたちが家  
族連れで帰  
って来る。  
活動の原点  
は、自分た  
ちの住む地  
域であり、  
あじさいを  
愛でるやさ  
しさである。



あじさいまつり

伝わって来るようである。この地  
区では、「自分さえ良ければ」と  
いう現代社会の病巣が、「やさし  
さ、おもしろい」という住民ドク  
ターの力で根絶されているかのよ  
うである。

■あじさいまつり

このあじさいロードの整備は、  
前述のとおり住民が自分たちのた  
めに始めたのもであり、決して観  
光資源にしようなどと考えてのも  
のではない。「自分たちの住んで  
いるところを花で飾りたいという  
純粹な動機から」と大

一見この「まつり」により、活  
動の本質が変化したのではとの印  
象を受けるが、さにあらず。それ  
までにも増して、グループの結束  
力は強まり、活動そのものへの誇  
りが一段と高まったという。  
まつりが近づくと、地区をあげ

準備に取りかか  
る。「心がときめ  
く」といった気分  
で本職は手に付か  
ない状態という。

今回取材してみても、ある意味で  
まちづくりの本質を教えていただ  
いたような気がする。  
地道な活動が地域の結束力を強  
め、地元を離れた出身者は胸を  
張ってふるさとを語り、子供たち  
は、自分のふるさとに誇りを持つ  
ようになった。また、まつりには、

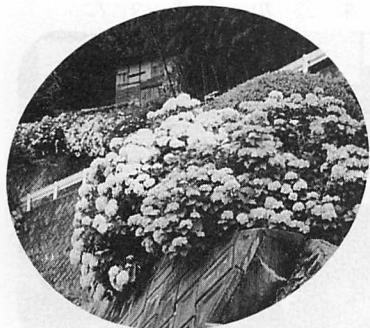
取材／主任研究員 松森陽太郎

西会長さん。この「自  
分たちの」が、十八年  
の永きに渡り活動が継  
続されてきた一番の理



大西 武会長さん

て準備に取りかか  
る。「心がときめ  
く」といった気分  
で本職は手に付か  
ない状態という。



特集  
 探る やさしさのなかから  
 やさしさを探る

やさしさ 本物の魅力

松山市 朴の会本部世話人  
 片山 克

日本を代表する詩人坂村真民さんの詩とその生き方を広く世の中に紹介すること。

具体的な活動としては、真民さんの詩集や詩墨、その他資料を常時「朴庵」に展示するとともに、毎月第一日曜日の午前十一時から、真民さんご自身に来て頂き、講話をお願いしている。

以下、県外からの来訪者の方から、「愛媛の人が羨ましい」と言われている「坂村真民さんを囲む会 朴庵例会」を簡単にご紹介します。

■「朴庵例会」のスタート  
 平成元年十一月、日本料理の店「開花亭」がオープンするのの際し、地元の実民ファンの「坂村真

民資料館」設置の願望に応えた、同店経営者の肝入りで、開花亭の一角を無償で借り受ける話がまとまった。

そこに、近所の住人稲荷喜久夫氏が、手持ちの真民詩墨の額や軸を掛けられ、陶芸家森之青芳氏が、真民詩のイメージで作り上げた自作の青芳人形を展示されて、「ミニ真民資料館」が出来上がった。

これに感激した坂村真民さんが、そこを「朴庵」（朴の花言葉は、「誠実な友情」と名づけ、月一回、講話をする約束をされた。

このような経過から、「朴庵例会」は、平成二年一月にスタートし、今日に至っている。

■坂村真民さんの講話

真民さんは、長らく師範学校や高等学校で国語教師として勤められ、大変にお話の上手な方であるが、あちこちからの講演依頼には、「私は、詩人だから」と言っただけで断り続けておられる。

それだけに、月一回の講話は値千金で、古くからのファンはもとより、最近では、真民詩を知って感

動した人達までが、

全国から例会に参集するようになった。

毎月の参加者約百名中、二十名程度は県外の方で、北は北海道、秋田、岩手、南は沖縄、鹿児島、熊本などほぼ全国から、わざわざ砥部町の朴庵を訪ねて来られる。

真民さんの講話は、「時」「知足」「発願」「光と風」「陰徳を積む」「般若の知恵」「あうんの世界」「偶然論と必然論」など、文学や宗教、倫理、哲学、科学の分野にまたがり、聞く人の心を洗う。そして、毎月のお話の中で一貫している考え方は、「人はいかに生きるか」ということである。

■昼食懇談会

講話は、午前十一時から十二時過ぎまでの約一時間十分。その後

心のやすらぎを求めて、毎月第一日曜日には、全国から沢山の人が、砥部町の「朴庵」に集まってくる。

そのお世話をしているのが、「朴庵例会」（会長 稲荷喜久夫）である。

この会の目的は、砥部町在住の

朴庵の真民詩碑の前で  
 坂村真民さんと片山さん(右側)



高校生も先生といっしょに  
 感激のあいさつ



は、希望者による昼食懇談会となる。

会場費も講演料もタダ。せめて昼食代くらいは払って帰りたいという参加者の気持を汲んでの会食では、真民さんと膝付き合わせてお話出来るとあって、これがまた、参加者の楽しみの一つとなつている。稲荷会長の軽妙な司会で、県外の人、初参加の人には、全員に自己紹介をお願いしている。

「お話を聞いて、生きる勇気が湧いてきた」「長い人生で、これほど感動した日はない」「高校生の中から分かるお話で、感銘を受けた」など、特に人前であまり話をしたことのない人の感激の挨拶は、胸を打つ。中には、話しながら、興奮のあまりに泣きだす人もある。

### ■真民詩碑が町おこしの目玉に■

「念ずれば花ひらく」や「二度とない人生だから」など真民さんの詩碑を建立した人、これから建てたいと言う人も多い。

これらの詩碑は、「世界の平和と人類の幸福」を祈り続ける真民

さんの思い、生きざまに共感した人が、世の人々の幸せを願うやさしい心とその実現に努力する自らの決意の証として建てられるもので、現在、二百八十基余りあり、なお増え続けている。

その内訳は、国内四十一都道府県に二百六十余基、海外に約二十基となっている。

地元愛媛県に次いで、二番目に多い岐阜県では、若手経営者グループ「21世紀クラブ」等により、まちづくり運動の一環として真民詩碑が除幕された。

その中には、日本大正村（岐阜県明智町）の目玉となった詩碑や、高さ十一メートル、重さ四十一トン、世界一大きな岐阜県恵那市にある企業の真民碑がある。それらの文字は、すべて真民さんの揮毫によるものである。

海外は、インド、モンゴル、フランス、アメリカ、ブラジル、オーストラリアなど広域に渡り、目下準備中のイスラエルとエチオピアの碑が完成する来年には、真民さんの詩碑は、世界の五大州すべて



日本大正村に建てられた真民詩碑

### ■本物の魅力■

例会への参加は、老若男女、職業、階層を問わず、希望する人なら誰でも歓迎している。そのため勧誘や宣伝は、真民さんのお考えに反するため一切やらないが、なぜか全国の真民ファンに知れ渡ってきた。

その理由は、一言で言えば、「本物の持つ魅力」ということではないかと思われる。

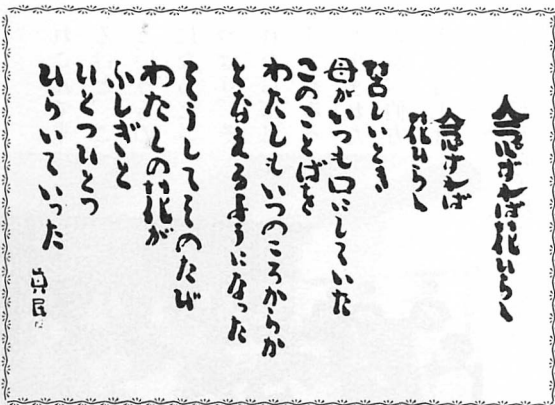
清澄な詩境から生まれる真民詩は、中学校や高校の教科書に取り上げられているものも多く、いずれも平明で、学生はもちろん、保育園の三才児からお年寄りまで、あらゆる年代の人に口ずさまれている。

また、自らに厳しい求道者であ

り、一宗一派に偏らない敬虔な宗教詩人坂村真民さんのお話は、本物の魅力にあふれている。

真民さんは、「観光より信仰だ」とよく言われるが、朴庵を訪れる県外の人達は、真つ先に祇部に来て、時間があれば松山周辺の名所に出かけるといふコースを辿っている。

町おこし、地域づくりのキーワードは、「やさしさ」にあり、真民さんと「朴庵例会」に集まる人々とのふれあいの中にも、一つのヒントがあるのではないかと思う。



特集  
 さしさを探る  
 やれあいのなかから

熱いエナジー

伯方おはなしキャラバン  
 山岡 美穂子

電気製品、食品、衣服にくだらないオモチャと、日本全国津々浦々商品であふれかえています。TVではCMタレントなる者が、分かっていのか分かっていないのか、各社の商品を褒めまくり声高にしゃべり続けている。日本っ

後列左から4人目が山岡美穂子さん



あふれよるようになったのだろう。瀬戸内海の地図にも載らないような小さな島にさえレンタルビデオ屋が二軒もある。

今の日本は、ゲートボール、カラオケ、ミニバレー、花火大会とどこへ行ってもやっていることは同じ。海だって、砂浜がどうなるかと知ったことじゃない。とにかく、立派な防波堤を作らねば、「せねば、せねば。あれもせねば」と、

日本中せねば病に取り憑かれ、一方では、できました、できましたのナントカホール群。

見かけませんか？田んぼの中にひとつ、島の中にひとつと。大きなホールができるのは、もちろん結構なことですが、そこには中身が伴ってもらわないと困るのです。毎日の維持費だけでも大変というナントカ会館、ナントカホール。みんなが楽しく利用してこそ、作った甲斐があるというもの。建物を同じように作り、東京や大阪にあるのと同じような洋服が愛媛に並んでも、「文化」はおいそれとはやってきました。

「あの人のコンサートに行きたい」「あのお芝居が観たい」と思っても、田舎に住んでいると、「ちよつと行ってきました」とかいう訳にはいかない。ましてや、子供達を対象にしたものとなると、もっと難しい。子供達の柔らかな感性を育むものが、TVだけというのはとても淋しい話です。くだらないものは都会並みに、どんどん流

れこんで来るけど、こういうものになるとさっぱり。それならば私達でやろうと生まれたのが、「伯方おはなしキャラバン」

です。だから手抜きはしない。音楽だっけきっちり入っており、劇を盛り上げています。効果音も、あつちから、こつちから探してくるなど、このあたりはもうプロ並み。

私がキャラバンに入って、まず驚いたのがこのことでした。「人形劇自体もさることながら、大道具、小道具、そして効果音……。すごい！プロみたいだ」と秘かに思っていました。後日、リーダーが、どこかのインタビューに答えているのを聞いて、納得。「なかなか生の人形劇に触れることのない子供達に観てもらおうのですから、



朝倉村での公演

大道具、小道具、照明とかもきちんとしていたいんです」

魚島にて

■このリーダーの言葉で想い浮かぶのは、魚島というとても小さな島で人形劇をしたときのこと。この島に渡る為には、船を二回乗り継ぎます。二回目の船は、車を積めない小さな船。車は港に駐車し、荷物は「わっせ、わっせ」とメンバーで船に積み込みます。フィリップ・マローのセリフじゃないけれど、女だつて「タフじゃないければ、生きてゆけない」のです。小さいながらも新しい船が波を切って進むこと四〇分、魚島に着。港のすぐそこには五階建のビル。そして、

島のような所なんだろうなと思います。

さて、港に着くと、村長さんをはじめ、先生、御父兄の方々が、荷物を運んで下さり、とても楽をさせていただきました。ビル三階のホールに、エレベーターで荷物を運ぶ。仕度がすっかり整った頃、同じ建物の一階にある保育園と少し山手にある小学校から、小さなお客さん達がやって来る。園児達は、黒いけこみの横から盛んに話しかけてくる。小学生達は、そんな園児達の後ろで、ちよつとすまし顔。そして、人形劇が始まる。園児達はますます元気になり、立ち上がって全身で人形と対話している。そうこうしているうちに、小学

そのビルを取り巻くように、民家が点在する。後ろにはすぐ山。街の人達が、「島」と聞いてイメージするのは、きつと魚

生もついにしゃべり出す。私は、いたずらオバケ「ケンムン」の演者。いたずらが大好きなケンムンは、毎回、子供達から野次をとばされる。劇の後半部で、ケンムンがみんなに捕まって両手をびろーんと伸ばされてしまうシーンがある。痛いよオ、痛いよオ」と泣くケンムンに、「早く直して



が、その真剣な目に表れていて、二度びつくりしたのでした。  
「ありがとう」。そんなあなたたちがいるから、真夏の公演だつて平ちゃらです。私達を熱くしてくれるあなたたちのエナジー、全身で受け止めます。

あげて」と言うやさしい子がいる。司会者が、「ねえ、みんなケンムンのこの手、直してあげてもいい？」と問い掛ける。すると、大きな声で「いいよお」のコール。内子町で、同じくケンムンを上演した時、一人の女の子が、「ケンムン、もういたずらしちゃいけないよ」と声を掛けてくれました。いたずら者のケンムン、思わず隣の女の子にちょっかいを出したところ、さっきの女の子が、「こらあーケンムン！まだ分らないのか！！」ってすごい剣幕でかかって来るのでびっくり。すっかりケンムンの世界に入ってる様子

■最後になりましたが、これからの希望について、触れておきます。私達の活動を理解していただくために、「伯方おはなしキャラバン」の頭に、「お母さん達の」という言葉を付けて呼ぶ人達の意識を変えてゆきたいと思っています。「お母さん達の」が付くことによつて、主婦が片手間にちよこちよこつと活動しているといった印象を受けがちです。決して、片手間にできるものではないのですが、私達自身がそう感じているということは、呼ぶ側もおそらくそう思っているのだと思います。「お母さん達の」を付けさせぬよう、より気合の入った活動ができるように、練習に励んでゆきたいと思っています。



## 見聞 スイスを歩いた2週間／見想録(VII)

### 【新しい自由への象徴「記事」後一】

◇コイン／勘定音痴が訝る発見

「これ良からう…、〇万〇千円だった…」と、〇さんは買ったばかりの包みを破り…腕時計を見せながら、店の主人とのやりとりを話してくれた。凄…海外を旅慣れた〇さんとはいえ、その場で円換算をしつつ値段の交渉をするなど…私には啞然・驚嘆だ。

モスクワ空港で小銭入れを落した私は数日前、ここインターレーケンの小間物店のショーウインドで、アルペン帽型小銭入れを見つけたが、値段も読めないうえに「どう話すか…」言葉が出ない。店の前を三度も往復し諦めた…。しかも昨日、ヨーロッパで一番高い登山鉄道の駅：ユングフラウ・ヨッホで、まあまあモノを買ったばかり。今日まで待てば〇さんに頼んでアレが買ったのに…残念。

昨日の私の買物は、傍にいたMさんに会話手帳を拝借、該当の言葉を探し女店員に示す。彼女は私

しい所にHELVETIAの刻字。『ヘルヴェティア』って何だ…。その時はそう思ったダケ。

◇含意？／進歩的知識人の願望

帰国後、吉田康彦氏の前掲書を繰ると、「単一の言語を持たないスイスの…いわば統一記号のようなものがHELVETIAだ…」とある。BC五八年シーザーが…古代スイスに住むケルト系ヘルベティー族を征服した。以来スイス地域をこの種族名で呼ぶとか。

シーザーの『ガリア戦記』(岩波文庫)の冒頭がヘルベティー族との戦いだ、吉田氏は「彼はこの敵を勇猛果敢な部族に描き、今日の質実剛健なスイス人の原型を伺わせる…」と言う。また、コインのほか切手やヨーロッパを走るスイス車の国名表示も…ヘルヴェティア連邦CHだと述べる。

知られる通りスイスの国名は、誓約同盟／原スイス三邦の一つシユヴィーツからきたのだが、スイス人が今もヘルヴェティアを名乗るのは興味深い。そこで前掲『スイス現代史』を辿ると、その名が

四回出る。最初が一七六一年「ヘルヴェティア協会の設立」。次が一七九八年「ヘルヴェティア共和国成立」。次が一八〇七年「ヘルヴェティア協会再興」。最後が一九一四年「新ヘルヴェティア協会設立」であり、いずれも保守的な支配勢力の専横に対し、進歩的な知識人たちが、人びとへの啓蒙の意を込めて使ったように想える。

ともあれ、最初の『ヘルヴェティア協会の設立』は、前掲の田口晃氏が「十七、十八世紀は、他国の場合と意味も程度も異なるが、スイス史における『絶対主義の時代』と呼ばれている…」と表現された…そんな時代の末近くの設立で、世紀末には次の『ヘルヴェティア共和国』が誕生する。

この時代フランスでは、一七五一年『百科辞典』出版。同五五年『人間不平等起源論』、同六二年『社会契約論』が発表されて、当時のヨーロッパは啓蒙主義が風靡しており、その影響を受けたと思う…支配階級の知識人たちが創ったのが『ヘルヴェティア協会』のよう

だ。だからか社会体制に対する改革プログラムや組織を創る試みはしたが、部分的で非政治的な啓蒙活動に止ったようだ。

◇仕組み／スイス絶対主義の時代  
ここで私が不審なのは……あんなに苦難を重ねて守った「住民自治」の自由スイスなのに、なぜ「絶対主義の時代」が……である。

田口氏は、「十七〜十八世紀のスイス契約同盟は、形式上それ以前と同様……住民大会（ランツゲマインデール青空議会）の直接民主政を行う森林諸邦と東北の小邦。手工業者同業組合制（ツunft制）に基づく代議制をもつチューリッヒ・バーゼル・ザンクト・ガレン・シャフハウゼン。門閥が支配するベルン・フリーブル・ゾロトゥールン・ルツェルン等、三種の異なる政体諸邦の同盟だった……」

都市貴族が支配する諸邦以外でも……実質は小数の特定家族出身者が世襲的に政治支配をしていたし、直接民主制の諸邦も住民大会が形骸化して、同様の態勢にあった上、誓約同盟諸邦の関係も……全て平

等というには程遠く、支配的な邦に対して従属地域が依然として存在した。しかし、そうした支配体制で一応の安定をみていたので、『絶対主義の時代』と呼ばれた……」

とされるが、その支配体制づくりの経緯と専横・汚職等の腐敗ぶりを、ストッキアー著『スイスの知恵』（吉田康彦訳／サイマル出版会）が、具体事例で紹介するのを見ると……成程と思う。

特に、同盟の関係は複雑で、中世的筋立てもあって私たちには理解し難いが、当時の十三邦同盟は、原スイス三邦が結んだ一つの『誓約』によるのではなく、新たな邦の加盟は、その邦の実状や時代的状况等で個別に結ばれており、原初三邦以外は各々異なった十個の基本同盟を結び……その集合体が誓約同盟なのである。

従って、かなりの片務的な義務を負う邦々もあったようだ。たとえばグラールスは、誓約同盟がハプスブルク家の支配を排除した後に加盟なので……、相互援助では無条件に援助義務を負うが、既同盟

邦側は援助地域を限ったり……援助拒否もできた。また他の勢力と同盟を結ぶ場合、既同盟邦は自由に行えるがグラールスは既同盟邦の同意が必要だった。しかもグラールスは誓約同盟に加入したが、その対象からルツェルンが除かれている等で、総ての同盟諸邦と係わるのは原初三邦のみだった。

この他にも、誓約同盟を補強する副同盟の関係があった。それは誓約同盟が強くなるにつれ保護を求めてきた地域で、正式メンバーになれない……いわゆる従属邦。それらはグラールスよりも厳しい片務義務を負う。例えば相互援助は、援助を求める場合も援助する場合も、費用はその地域の自己負担とされている等であった。

◇独断か／想像のヘルヴェティア  
ここで私は、大きな誤解に気づく……それは、私がこれまで述べた「スイス史」で……人びとが守ってきた「自由」とは、今の私たちが考える『人間／個人の自由』ではなく……、スイス各邦が外部からの干渉を排除し、伝来の「自治を

行う自由」だったようだ。勿論、この『伝来の自由』は、スイスの人びとにとって、今日でも他に類をみない貴重な資産なのだが……それが、この時代の人びとに意識されてきたとは考えにくい。

いわば、生物自然の共生秩序（自由）を守る本能的な戦いだったため、当時、僅かに自由に目覚めかけた……、三十年戦争直後の農民戦争や他の若干の一揆が簡単に鎮圧され、二度のフィルメルゲン宗教戦争を封じ込められると、前述のような支配体制でも……、大勢として安定を続けられたようだ。

従ってこの後に続く、「誓約同盟の崩壊」から「スイス革命の時代」を経て「今日への発展」が進行する上で、極めて重要な一方の要素となる……、新しい自由への進歩的勢力の形成を期待した記号が、『ヘルヴェティア』と想う……が独断に過ぎる想像だろうか。

# 地域の未来を考える

## — 第一回全国定住化フォーラム

### に参加して—

研究員 松岡正範

#### ■はじめに

平成五年九月十七日。午前六時二十分、普段より一時間余り早く起きる。今日、明日と島根県吉田村で開催される「第一回全国定住化フォーラム」に参加するためである。起床時より体が熱っぽく喉が渴き、少し痛みもある。フォーラムに参加する期待で興奮している訳ではなく、どうも風邪を引いたようだ。

堀江港から阿賀行きフェリーに乗る。残念ながら体調は不十分であるが、遙か吉田村を想い気が引き締まる。広島県の阿賀港から国道375号線を経て、中国山脈を越える国道54号線を走り、吉田村までの所要時間は約四時間。山間部を走る国道の両側には、思ったよりも耕地が開け、半数近くの田は既に稲の刈り取りが終わっていた。点在する民家は、この地方独特の

赤茶色の石州瓦で統一され、四国とは違ったイメージを受けた。

会場である鉄の歴史村オープンエアミュージアム「木の国文化館」へは、開演直前の午後一時少し前に到着。会場は全国からの参加者約二百八十名の熱気に溢れていた。

#### ■基調講演

「土地の持つ力と地域の未来」と題したテーマにより、大森彌東京大学教養学部教授と藤原洋(脚鉄)の歴史村地域振興事業団専務理事のお二人から、基調講演があった。「人は人間に生れない。人間になるのである。生れることに責任はないが、生き方の選択はできる。ここに根源的責任が発生する。地域で生きる人は多いが、地域の中で自分を高めようとして地域を生きる人は少数である。一人でも多

く地域を生きる人をつくるのが大事であり、子供を土地に結び付けて育てている大人が居る地域が、活力ある地域となる」(大森彌氏)

「地方における人口は、市町村のみならず県単位でも減少している。かつては、若者が都市に就業の場を求めるといった社会減であったが、現在ではこれに自然減が加わり、過疎化に拍車をかけている。今や定住化という問題は、全国共通の課題となっている。ま

た一方では、現代の若者は、自分にとって豊かであると感ぜられる所を選択して、移住する人が増えている。しかもこの豊かさには、経済的、精神的、環境的な豊かさがあり、人によって求める豊かさは違い、いわゆる「選択的定住」が進んでいる。だから選択されるような地域を如何に創っていくかが大事となる。しかもその第一の選択者となるのは、その土地に生れ育った若者であり、選択するかどうかは大人の責任である。

そのためには土地が持っている力を引き出すことである。様々な

隠されている土地の力を発見し、如何に現代的意味を持たせるか。さらに、未来に向かってどう発展させていくかということだ。これからは文化のある地域が強い」(藤原洋氏)と、(脚鉄)の歴史村地域振興事業団設立に関しての事例を挙げながら、土地の持つ力と地域の未来について語られた。

#### ■レセプション

全国各地から集まったまちづくり活動者が一堂に会してのレセプションでは、まちづくりの先進地といわれる市町村の方々が、賑やかに談笑。その中に混じって様々な方々と直接お話をさせていだき、大変勉強になった。また、県内からも丹原町、面河村、内子町などからの参加者もあり、テーマの設定もさることながら、藤原さんのネットワークの広さに驚かされた。

#### ■ケーススタディー

翌日は、それぞれの地域でその土地の持つ力を引き出し、それを





活かして地域づくりに取り組んでいる先進事例を挙げながら、定住化の為に地域づくりへの具体策を追求しようと、知る人ぞ知る大分県湯布院町の溝口薫平氏、長野県小布施町の市村次夫氏、富山県利賀村の中谷信一氏の三名がそれぞれの意見を述べられた。

「湯布院には、農村文化とそれを支える自然がある。開発が進む今日であって、自然を大切にする当地は貴重な存在となっている。田舎でなければという潜在的な能力を引き出し、住民の日常的レベル

を引き上げていくことが、地域を高めることになる。大いなる田舎とするために長期ビジョンを立て、リゾート村を目指したまちづくりを展開している」(溝口薫平氏)

「町並み修景などにより、出会いを大切にする町を目指している小布施町では、『北齋と栗のまち』といわれるように歴史的遺産と産業を取り入れたまちづくりを展開している。このため、外部の知恵を取り入れながら、『来て良かった』と思っただけのような、来町者と住民の良い関係が将来に亘って保てる、そんなまちでありたいと考えている」(市村次夫氏)

「昔は、勉強して良い学校へ行き、村を出ていくことがステータスであり、親もそのように言っていた。村への愛着心というものは無かった。それほど全国的にも、利賀村ほど不便な所は無いというような地域であった。イベントに熱心な所だと思われがちだが、これは冬季でも収入を得ることのできる地場産業を育成することを狙いとしたものであり、まずその為

に都市の人を招き入れ、地場製品の消費拡大を図ろうと始めたものである。今ではふるさとを自慢にしてくれる若者が増えてきた」(中谷信一氏)

民間の活動が盛んな湯布院町・小布施町、行政主体のまちづくりが進む利賀村と、方法には違いがあるが、それぞれの土地の持つ歴史的・文化的条件を活かしたまちづくりの事例を聞くことができた。

■パネルディスカッション

フォーラムの締めは、大分県大山町の緒方英雄氏がコーディネーターを務めた、「地域の未来を考える」と題してのパネルディスカッション。

第三セクターを設立し、美しい三陸海岸の景観美を活かした観光産業や過疎地にアイガモの畜産業を興し、地域の特産品として就労の場を確保した岩手県田野畑村の伊達勝身氏や、歴史文化を取り入れ「古今伝授の里づくり」に取り組み岐阜県大和町の金子徳彦氏などが話題を提供されたが、「地域



づくりをしようとするとき、そこには必ず種がある。地域の持っている潜在資源をうまく利用しているところは自然であり、必然性を感ずる」(緒方英雄氏)という言葉が強く印象に残った。

二日間のフォーラムでは、全国各地でそれぞれの土地の特性を活かしたまちづくりが展開されていることを再認識すると共に、地域を構成する自然・もの・人の三要素の中でも、やはりリーダーとなる人が重要であり、そのリーダーの地域を越えたネットワークが、大切であるということを感じさせられた。

「ちょよ……ちょよと待って。私は何の肩書きももっていない主婦よ」。柴千恵子さんからバトンを渡されて大あわて。コーヒー片手に言いたい放題してますが、所詮は台所の「主」です。でも専業主婦などと呼ばれるにはちょよとお恥かしい。掃除、洗濯もろくに出来ない、いい年をしたオバハンです。

「よくまあこれで家族が我慢してくれるワ」などと時にしおらしく反省することはあっても、すぐまた忘れて、言いたい放題。

ずっと昔から「不言実行」という言葉に憧れながら、いつもやる事は正反対のことばかりです。

こんな私なのに、何故か、知人やお友達とは年齢に関係なく、みんな燃えている人たちばかり、いつもその人たちに啓蒙されてきました。

四、五年位前でしょうか、同期生のY君から「最近感動したよい詩があるから贈るよ」と、コピーしてもらったのが、サミエル・ウ

ルマンの「青春」という詩でした。「青春とは人生の或る期間を言うのではなく、心の様相を言うのだ」といった言葉からはじまる五百字あまりの詩ですが、詩というよりもむしろ人生訓といったものでした。ウームと感動していると、ずっと年上の知人から「このすばらしい詩をあなたに贈りたい」という手紙が届きました。ま

いつも「青春」  
今治市 本宮 和代

た、もう一人は「英語で暗唱できる位好きだ」と……。はからずも私は三人のボーイフレンド(?)から同じ詩を贈られたのです。私のまわりの男性たちは、どうもこの詩に魅了されていたようでした。

「青春」という言葉のもつ甘いひびきは心をくすぐります。明るい光と躍動。果てしなくひろがる大空のように思える未来。そして



アツと思う間もなく通り過ぎてしまった青春時代(歳をとると、その「時」をとりもどしたくて昔の仲間に逢いたがるのですが……)。自然の摂理で、どんなに地団太踏んだとしても肉体は刻々と老いて行きます。どうにもならないことです。でも、やさしい神様は、その人の自由になるように「心」だけを残しておいて下さいました。

(心の中で思うことは自由で、誰にもどうすることもできません)。たとえ外見はどんなに歳をとったとしても、心のフレッシュさは失われることはないでしょう。「詩」

の言葉を借りて言えば、「信念と共に若く……。自信と共に若く……。希望ある限り若く……。大地より、神より人より、美と喜悦、勇氣と壮大偉力との靈感を受ける限り人の若さは失われぬ」と……。

だからいつも「青春」の中いたいと思っっています。何の取柄もない私は、燃えている人たちに向かってチャアホーンを吹き鳴らし、「オーレ、オーレ、オーレ、オーレ！」と台所の中でウロウロしているだけなのですが、それでも心はさわやかです。

今回はすてきに燃えているお一人、同期生で新居浜市にお住まいの武田信之さんに、バトンをお渡しいたします。



―はじめに言葉ありき―言葉にこだわりを持ち、思いをめぐらしていたある日の午後、受話器を取ると電話の主は日頃から尊敬している先輩（郷土研究者）であった。「昨日話していたことが朝日新聞にすばり書いてある」とのこと。

期待を寄せて私はすぐ駆けつけた。

大見出しに「アナウンサー」

「言語道断」とあり、言葉の乱れに各放送局が手を焼き、指導に頭を痛めていると書かれてあった。

日頃から、暮らしの中で言葉の乱れが気になり、話すことを生業とする人達でさえ言葉遣いがおかしいので、話し言葉がやたらに気になるかと先日話していた矢先であった。

「ら抜き」言葉は、愛媛でも日常化してきた。おかしいことをおかしいと感じなくなることは恐しいことである。アナウンサーの誤読も、言葉の正確さに対する意識の薄さであり、怠慢である。



「松下村塾」を「マツシタソンジユク」と読む若者がいる。ご時勢とはいえ、テレビを含めて乱れた言葉の中で生活する人がさらに言葉の乱れに輪をかける悪循環のなかで、驚く程の間違いが起こるのは紛れもない事実である。

「汚名返上」を「汚名挽回」、「生き字引」を「生き地獄」といったケースは珍しくも

一、「何してる?」「人間してる」

これは幼児から大人までと幅広い。何が人間ぞと言いたい。人間ならぬくもりのある心を土台に適切な言葉で対応するもの。しらくれた人間無視は人間否定であり、自滅の証である。人だけが手と頭と心を使う。人間であることを生かす命いっばい大切に生きたいものがある。

二、動物（犬猫）に餌をあげる。

## 「言葉」ウォッチング

大洲市 白石 美子

ない。言葉の原点を思えばまさ

最近重視されている環境問題の中に、言語環境も取り入れたいものである。

言葉は、人が人たる証である。人の心を根っこに持つ言語環境に、私たちはどれ程課題意識を持って

植物（花木）に水をあげる。

神仏や人に水をあげるのとは訳がちがう。言葉は文化である。三、どうも、どうも。

「こんにちは」「さようなら」「ありがとう」「ごめんなさい」などの、心の動きにつながる適切な美しい言葉が減ってきている。

また、私は旅が好きだが、バス

ガイドの話の何とダラダラ聞きにくいことか。やたら「けれども、そして」が多くて長い。車は動いているのだ。すっきりと場所に合った要を得たガイドを期待したい。

さらに、素敵なシンボルマークやイメージイラストは結構だが、イメージ重視のあまり無理なフリガナのついた標語や、ポスター等に公の場に出合うと、これが文字の乱れを生んだり、言葉の感覚を迷わせたりすることにならないかと心配になる。国の乱れにつながる言葉の乱れは、意識の低さや暮らしの中での実践者としての弱さに直結する。適切な表現は、二十一世紀を生きる国際人として極めて重要な資質の一つであろう。私達は、原点に立ちかえり、心につながるよい言葉を身につけたいものである。

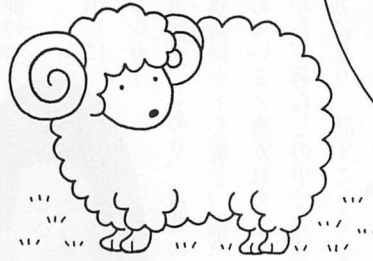
今回は、元小学校校長の今治市の山本弘子様にお願いします。

## 風早の郷に

## まちおこしの熱き風

北条市 若者塾かざはや

日和佐 健治



### 一 新生若者塾かざはや誕生！

平成四年度県生活文化若者塾活動推進事業の指定を再び受けることになり、平成二年度に発足して以来いつの間にか足ぶみ状態となっていた「若者塾かざはや」は、新たな局面を迎えることとなった。まず、若者塾のメンバーの再編。

「真に北条のまちを何とかしたい」「もっと住み良い魅力あるまちにしたい」と熱意あふれる人材を集めようと、市広報で公募の傍ら、まちづくりでは欠かせない存在の商工会青年部や市職員への積極的な勧誘を行うと共に、これまでとかく地域の青年組織に縁の薄かった銀行や学校についても、所属長を訪ね趣旨をご理解いただき、会員の輪を広げていった。

その結果、自営業、教員、銀行員、団体職員、会社員、公務員など三十名の多種多様な顔ぶれが、平成四年七月二十五日の開塾式に揃うこととなったのである。中には、北条市の出身ながらも宇和島にお勤めの方や、お仕事のご縁で北条を第二のふるさととして、こよなく愛して下さっている松山市民の方もいて、そのひたむきで真摯な活動ぶりは、私をはじめ市内在住の塾生に大いなる刺激となっているものと思う。「地域づくりは人づくり」とよく言われるが、北条市の活性化のため、新しい波を風を起こしていこうとする集団に、

市内在住か否かなどということは問題ではない。要は、どれだけ北条を愛し、これを誇りとして生きているか。今、何が問題で、どういうアクションが起こせるかという気持ちがあれば何でもあれば十分なのだということを、一年彼らと活動を共にしてきて、つくづくと思う。

かくして北条市生活文化若者塾かざはやは、ここにリフレッシュに再生したのである。

### 二 目からウロコが落ちた

#### ―丹原若者塾との交流会―

活動再開から三ヵ月経ったころ、今や全国区の知名度を得た「T・Y・C」(丹原若者塾)に交流を申し込んだ。課題や質問を整理しないまま半ばピクニック気分で出かけた塾生たちを待っていたのは、「T・Y・C」メンバーの常識を超えたアイデアと行動力を裏づける真剣で敵しい言葉の数々だった。曰く、「会いたい人がいれば北海道だろうが、どこへでも自費で行く」「一泊につき三時間の事前研修

と報告は欠かさない」「中国四川省の農業視察団を招いて交流したとき、(見返りとして?)パングを譲ってほしいと言っ

ておいた」「合言葉は「得意技で勝負しろ」」「知恵の限りを尽くせ」「足を引つ張られたときに潰れるか、頑張れるかだ」云々。

まさに目からウロコが落ちるとはこのこと。役所がやれと言ったから、補助金がつくと言ったからやりました」というのとは次元が違う。

### 三 動いて何かを始めたら

#### 為すべきことが見えてきた

県の補助金交付要綱などの兼ね合いもあって、四年度の活動内容は自ずとまちづくりの学習活動が中心にならざるを得なかったことは否めない。しかし、まちづくり実践活動への助走期間として、ま



老人ホームを慰問のメンバー  
後列向かって右から2人目が  
日和佐さん



## 河野水軍行列に参加の一コマ



あったとされ、古代の軍港熟田津が、実は北条市にあったと著者の書

生が偶然図書館で発見したのがきっかけ。誌面の都合で氏の明快な根拠を一々列挙するゆとりはないが、塾生の間では「全国的に有名な熟田津が北条というのは興味深い。この説を前面に押し出し、今後のまちおこしの核としたい」と前向きな発言が続出。この説を市民に分かりやすく紹介し、次代を担う子供たちの郷土史の学習にも役立ててもらおうと、これをビデオ化することを決定した。

そして、今年八月十四日、改めて松岡氏を上浦町に訪ね、氏が根拠に挙げる『三島宮社記』などについて直に説明を受けながら、ビデオ取材を行ってきた。

また北条市は、伊予水軍の先駆者で、足利時代には伊予国の守護職に任じられた河野氏のゆかりの地であり、数年前からは商工会青年部等が中心となって、夏まつり



のイベントとして河野水軍行列や、水軍レースを実施している。塾生も昨年来、多数が武将や家臣、姫君などの役を積極的にこなしてきている。こんな経緯もあって、上浦町を訪ねた前日には、水軍文化のネットワークを広げてまちおこしに役立てようと、能島村上水軍の拠点である越智郡宮窪町を訪ね、「水軍ふるさと会」(矢野久志会長)と交流した。

ふるさと会は、今夏初めて、伯方町、上浦町との三町合同による水軍レースを見事成功させた実績を誇る、まちおこしグループの先輩。参加した塾生らは、オンラインワンの河野水軍をモチーフにしたまちおこしに意欲を駆り立てられたようだ。

また、七月二十四日には市内の特養ホームを慰問し、自作自演の時代劇「愛は勝つ!—河野通有奮戦記—」を披露した。通有が盗賊にさらわれた娘を救い出し、愛に正直に生きる民衆の姿に心打たれるという三十分ものストーリー。度重なる練習の成果も出て、また衣装も本格的とあってお年寄りから大いに喜ばれた。

四 ひとが輝きまちが輝く  
この一年余りの学習活動、そしてさやかな実践活動を通して、事務局として何よりもうれしく、また心強く思うのは、『人が変わらなければ、まちは変わらない』というテーゼが、塾生一人ひとりに芽生えてきたこと。『村おこしは風の唄』の著者福井榮一氏の言葉を借りて言うならば、「村おこしは人づくり、人づくりは心の風おこし」—その限りにおいて若者塾かざはやの塾生の心の中には、風早の郷(さと)らしく着実に、そして絶えることのないまちおこしの熱き風が今日も巻き起こっているのは確かなのである。

## 寸劇「愛は勝つ」

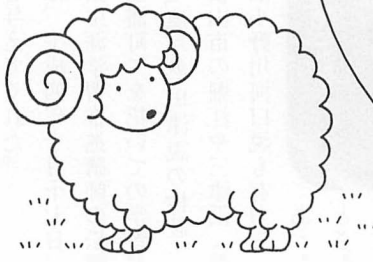
河野通有奮戦記

# 元気印レポート

## こだわり そして地域づくり

玉川町地域づくり研究会「源流」

会長 小山田 憲正



後援会であいさつする小山田会長

ことが私たちの「源流」の特徴かもしれません。毎月の定例会には、まちづくり総合センターの助言も頂きながら、ふるさとに懸ける夢を描いてきました。

我がふるさと「玉川」は、今治市の隣り、ひと山越えれば道後温泉があります。人口は六千人ほどの町です。紹介すると、なんと顔の無い町なのかと思われることでしょう。一村一品運動のような、全国的知名度をもつ町の特産品や、「木の町」「歴史の町」といった、大きなキャッチフレーズを持たない町であります。顔の無い町というより、多くの顔を持った町であり、それだけに夢ふくらむ町であります。

■活動から  
町については、私自身が、十四五年前に県外から移住した者であるため、まだ十分には分かりません。町外から嫁いで来た人や若者にとつては、町に住んでいる所ではないかという一面があったのではないのでしょうか。

我が町の地域づくり研究会「源流」も、誕生して一年半が経ちました。会員は、町内外で各種のボランティアを各々実行されている方が、町の呼び掛けで集まりました。年齢も、二十代から六十代と幅広く、女性も半数近くおり、年代や性別を越えた意見が交される

「相手を知らなければ愛せない」

のと同様、まず定例会では町を知ろうということ、会員各々にとつての町について話し合いました。町長からも長時間に渡り、町に対する熱い思いを聞かせていただくことができました。また、双海町の若松進一さん、大分県大山町の緒方英雄さんをお迎えして、懇談会や町民を対象とした講演会を開催してきました。

今、玉川町にも、町おこしのそよ風が吹き始めたように思っております。この四月からは、三、四年かけて、町内の歴史や伝承を尋ね、地図や案内板を作り、ゆくゆくはウォークラリーのようなイベントの開催を企画しています。

ここ最近では、現地調査を実施していますが、永く町内に住んでいる方でさえ「こんな所は来たことがない」と言うこともまれではありません。まして玉川町に住んで間もない者にとつては、発見の連続でありました。

今はまだまだ細やかな活動ですが、ふるさとを愛する思いは一人倍強い仲間だと信じております。

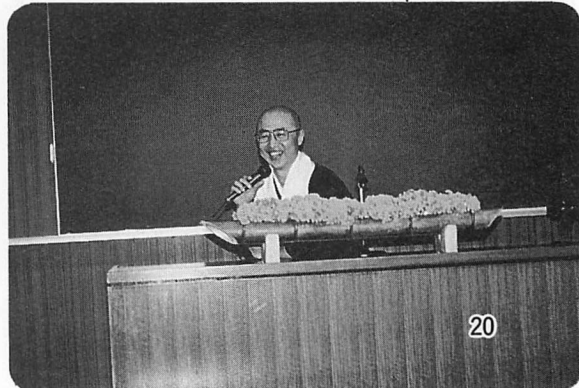
■双海町に学ぶ  
先日は、

双海町の「夕焼けプラットホームコンサート」を見に行きました

が、残念ながら、日本一の夕日は雲の中へ沈んでしまいました。けれども、出演者の呼び掛けるような、そして語り掛けるような歌声に、夕日のこどもも忘れて聞き入っていました。

的に恵まれない町でも、人

「源流」主催の講演会





を愛し、  
地域を  
愛して  
いる人  
々が根  
付いて  
いるこ  
とを痛  
感して  
帰りま  
した。

若松

進一さんに初めてお会いした時、  
名刺には、「日本一美しい双海の  
夕日」とありました。かねがね、

我が山  
寺から  
の眺望

が日本  
一と思  
ってお  
りまし  
たが、  
先に名  
乗られ  
てしま  
いまし

た。その後、夕方に双海町の方が、

徒歩遍路で山寺に立ち寄った時、

「どうです、双海町の夕日より美

しいでしょう」と声を掛けました

ら、その方は、「この夕日も美

しいということでしたら、そう思

います」と答えました。続けて、「ぜ

ひ一度でいいですから、双海の町

に来て下さい。夕日が海に沈む時

は、ジュウと大きな音を立てます

よ。そして蒸気が立ち昇ります。

素晴らしく大きな太陽ですよ」と

そう言っ立ち去りました。

あまりの表現に呆気にとられて

しまいました。地域おこしのリー

ダーであればともかく、一町民の

口からこんな言葉を聞くとは思

りませんでした。

日本一の夕日を見に行きました

が、夕日が見えなくとも、皆満足

して帰られたことと思います。お

そらくあのコンサートを実行され

た方の全てが、「双海町が天下一

当然夕日も日本一」との思いを

持っていたに違いありません。そ

の思いが皆に伝わり、満足となっ

たと思います。もうひとつと言

ならば、日本一の夕日はどうでも

よいのです。どれだけふるさとの

町にこだわっているか、その思い

を確かめ、伝え合えさえすれば、

コンサートすらなくともよかつた

のです。

■人はふるさとを選べない■

私たち人間の営みにおいて、必

然性をもって存在しているものは、

どれほどのものがあるでしょう。

仕事にしても、ある人は天職と思

い、一生懸命に励まれるが、別の

人にとっては、偶然に出合ったも

ので、しかも生活のために仕事を

しているに過ぎないと思われる時

もありましょう。一生懸命になり

過ぎて、自らの寿命を縮める場合

もあります。適当にことを済ませ

て、人生を大過なく過ごす人もお

ります。どちらが幸、不幸かは、

本人の価値観によるものでありま

すが、どちらがより多くの感動を

得たかは、明らかではありません。

人は、親を選べないと同様に、

ふるさとを選べないのであります。

そこで生まれ、育ち、また縁があっ

てそこに住むことは、そこが我が

世界なのであります。

地域おこしに関わる多くの方は、

奉仕の心で、あるいは生涯学習や

使命感に燃えてと、様々な思いで

参加されていることと思います。

けれど、ここが我がふるさとであ

り、行動によってのみ感動を確か

め、伝えることができるというこ

とは確かでありませぬ。

■こだわりから■

大きな器を作ることには出来ない

かも知れません。「ユートピア」の

言葉のように、どこにもない所を

夢みているのかもしれない。

しかし、ふるさとにこだわり、

生き方としてこだわっていくこと

は、求道者の生き方にも似ていま

す。

さとの道も、こだわり続けた

後に見えてくるものであります。

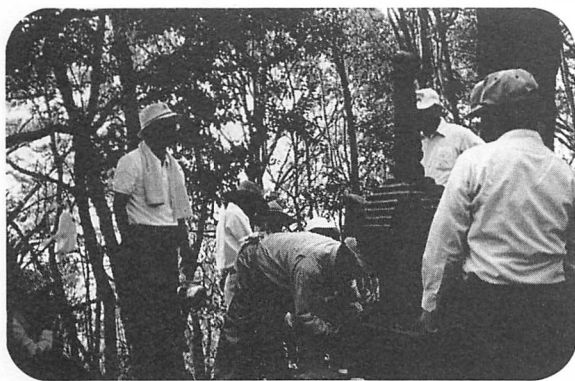
人間にこだわり、ふるさとにこ

だわりきった後には、大きな感動

と夢をもって、地平線に沈む夕日

のように、静寂な時が訪れること

でしょう。



# 快歩の一年間

弘川町役場 富永 廣次

(元研究員)

## 研究員活動を 振り返って

平成三年十二月、当時の直属の上司から「おまえ、「まちセン」へ行つて勉強して来んか。もちろん勉強にもなるし人脈も広がる。きつといい経験になるぞ」との誘いを受けました。

受けてました。

当時「まちセン」の名前くらいは知っていましたが、詳しいことも分からないまま「行かしてもらえないのなら行ってもいいな」くらいにしか思っていませんでした。

そして三月の中旬、理事者から「ほぼ間違いないので異動の準備をしておきなさい」とのお話をいただいた。「よし、行くからはタダでは帰らんぞ」の思いで四月を迎えたのでした。

### ※自分づくり

センターでは、渡邊所長はじめ皆さんに大変暖かく迎えていただきました。

しかしながら、四月の研修では、早くも先輩方の期待を裏切ることとなったのです。

その研修では、内子町、五十崎町、そして双海町を訪ね、それぞれのまちづくり実践者の方々からお話を聞かせていただきました。

ところが、失礼なことに、お話しは聞かせていただいたのですが、その本質を理解することは、到底自分には出来なかつたのです。

それでも私にも二つだけ分かったことがあります。それは、まちづくりの実践者の方々は、自分達の町や地域のことを自分達のようににとても真剣に考えておられること、そして、「まちづくり」の基本は、「自分づくり」であるということでした。

### ※研修旅行でない研修

私は、「研修旅行とは、それぞれの地域の色々な物を見て、帰ればそれで良い」と考えていました。

しかし「まちセン」での研修ではそれだけでは十分でないということを知りました。

それは、「人」が抜けているということなんです。人に会ってお話を聞くことで、それに至るまでのプロセスやまちづくりのコンセプト等、目に見えない部分が見えてくるからだと思うのです。

地域に暮らす住民の一人として、自分づくりをしながら輪を拡げ、地道にまちづくり活動が続いている様々な人達の話聞いてこそ真の研修なのだと教わりました。

### ※四匹の子豚

有名な「三匹の子豚」の話には、本当は四匹目がいたのです。

双海町のW氏によると、他の三匹がレンガや藁で家を建てたのに、この四匹目の子豚は家を建てなかつたのです。何のことかと聞いてみれば、それは「型破りな貴方の事です」との返事でした。褒められているのか、けなされているのか……。

いやいや、私は家を建てないの

ではありません。基礎を打つているところなのです。基礎を打ち始めて早くも何年かが過ぎてしまったのも事実です。

### ※終りではないけれど

二年の予定が、私事で一年で帰ることになりました。派遣時に、「タダでは帰らんぞ」のつもりがタダで帰ってしまったのではないかと残念でならないのですが、勉強はその気になればどこでもできると思っています。

もう一つ残念なことはこの一年間に、「まちセン」の研究員時代にお世話になった数多くの皆様にお礼を言うことができなかったことです。

大変失礼かとは思いますが、この誌面をお借りして心から厚くお礼申し上げます。





# 夢 創造 未来

## 魅力あるふるさとづくりを求めて —まちづくり草の根文化講演会—

(財)愛媛県まちづくり総合センターでは、地域固有の歴史や生活文化に裏打ちされたまちづくり活動の原点を探り、個性的で独創的な活力と潤いのあるふるさとづくりを進めていくため、まちづくり先進地の実践者を講師に招き、『まちづくり草の根文化講演会』を開催しています。

今年一回目の講演会を、七月二十八日(水)、「国宝とロマンの島」をキャッチフレーズにまちづくりを進めている越智郡大三島町において、

同町との共催により開催しました。

講師には、岐阜県明智町から日本大正村実行委員の橋本典明氏をお招きし、『住民主体のまちづくりー日本大正村からー』と題して、ご講演いただきました。

当日は、台風の余波が残るあいにくの空模様でしたが、地元から多数の熱心な住民の方々にお集まりいただきました。

橋本氏は、日本大正村の取組みを通して、まちづくりの第一歩はコミュニケーションづくりであり、お互いが相手をいたわりながら生き、そこに住む喜びを感じる事ができ、そこに住む喜びを感じることができると強調されました。

### 住民主体のまちづくり

『現在、私たちを取り巻く社会環境・経済情勢は大きく変化し、人々の意識も多様化している。それとともに、モノ・金に対する価値観も千差万別となった。また、自らの権利意識の増大が目立ち、様々な問題が生じているのも事実である。』

今、まさに時代が変わっていることをどう認識していくのか、これからまちのことを長い目でみつめ、ふるさとにこだわっていくことができるかどうかの分岐点に立っている。

これからのことを念頭に置いて、「まちの資産を活かして何をすればよいのか」「どのようにすれば住民が楽しく住めるのか」ということを考えてほしい。

そのためには、自分たちの意見や活動を地域の中にどう伝えていくのがポイントになる。

その第一歩は、人と人とのコミュニケーションである。出会った人へあいさつをすれば、それが人間関係の始まりとなる。

「日本大正村」においても、コミュニケーションづくりをベースに、人

間関係を円滑に進める仕掛けをつくり、仲間づくりを進めていった。老いも若きも同じ舞台上で語れる場をつくる必要がある。

また、人脈をつくることも重要である。そのためには、お金をかけないイベントを行うことも一つの方策となる。自分を基本としつつ、外の力を利用してもらうのである。

人に会ったらあいさつをする…、こんな「あたりまえのことをあたりまえにしているまち」、それがまちづくりである。人間として生き、お互いが相手のことを心配しながら住んでいるまち…。そういうまちに住む喜びを感じることができるようにしていくことが必要である。

今から、自分でもよいから一つでも二つでもやってみてほしい。意識が変われば、新たな行動が生れる。そしてまちが変わる。』

日本大正村における住民主体の実践活動は、参加者に大きな感動を与えました。今回の講演会が、当地域のまちづくり活動の大きな契機となり、糧となることを期待するものです。(研究員 石家 清)



講演する橋本典明氏



# はじめました ふる里留学生制度

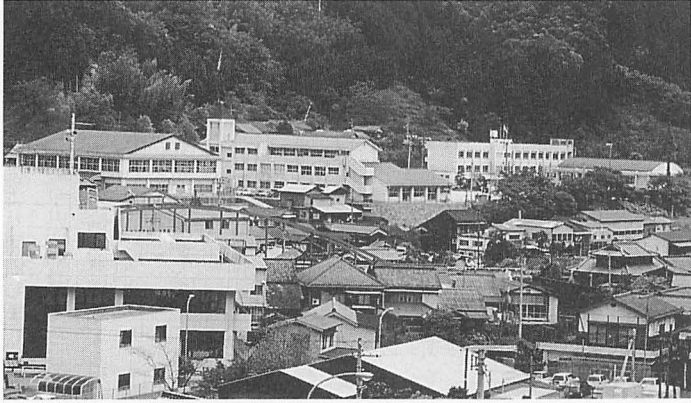
日吉村

日吉村の村づくりのキャッチフレーズは、『ゆとりときずなのふる里づくり』。

この度、その一貫として「ふる里留学生制度」を発足しました。

村外（全国）から村内の小中学校へ留学生を受け入れ、村の児童生徒とのきずなを深め、体験学習や遊びを通して、情操（やさしさ、思いやり、自立、使命感）豊かな子供の育成を目指すこととします。

当面は、里親による運営ですが、ごく近い将来、寮制との併用による運営を考えています。  
受け入れる留学生の数は、十



十五名で、平成六年四月入学期から受け入れます。  
現在、その募集を行っています。  
日本最後の清流四万十川の源流域に位置する自然を活かした留学生制度に、村内外から大きな期待が寄せられています。

問合せ先 日吉村教育委員会  
☎0895(44)2129

# とべ温泉 『湯砥里館』オープン

砥部町

あらゆる世代の人々が集う保養と憩いの場、とべ温泉「湯砥里館」が、八月六日にオープンしました。  
当館のお湯は、良質のナトリウム泉で、気泡風呂・超音波風呂・うたせ湯・サウナ・水風呂と五種類の浴槽があります。また、浴室内では、インド更紗の模様をイメージして描かれた砥部焼の陶壁「砥部更紗」が、入浴者の目を楽しませてくれます。  
湯上がりは、三十畳の和室休憩



室でゆっくりくつろいでいただき、ゆったりとしたロビーからは、自然あふれる街並みや、隣接する町総合公園が一望でき、身も心もリフレッシュできます。また、うどん・そばなどの軽食コーナーも設けております。  
皆様のご来館を心からお待ちしております。

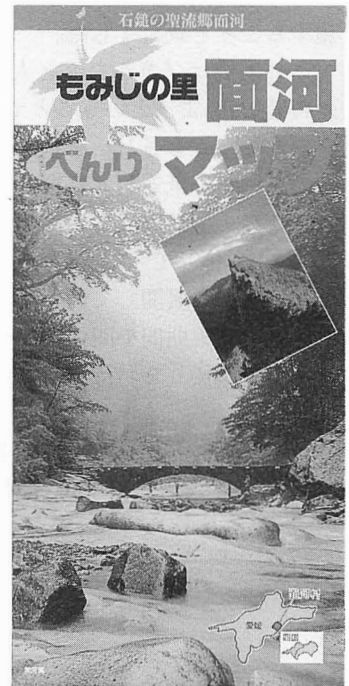
- 入浴料金 大人三五〇円 子供二〇〇円
  - 営業時間 午前十時～午後十時
  - 適応症 神経痛・筋肉痛・うちみ・痔症・冷え症・疲労回復等
- 問合せ先 とべ温泉『湯砥里館』  
☎0899(62)7200



## もみじの里 面河 べんりマップ

面河村

B5サイズで  
見やすいですヨ。



観光客に道を尋ねられると、複雑でわかりにくいという声をよく耳にします。こうした観光客の声に応えようと、平成三年に誕生した村おこしグループ「平成おもご塾」は、マップ作りに取り組みで、きました。そして、一年がかりで、『もみじの里面河べんりマップ』

として完成しました。

マップは、表面を面河溪谷と笹倉湿原のカラー写真で飾り、面河村の各種イベントや郷土料理が紹介してあります。裏面には複雑な道路の分岐点をピックアップし、分かり易くした色鮮やかなイラスト地図で、国民宿舎やキャンプ場などの観光施設のほか、主要公共施設も含め四十八カ所が、番号で探せるようになっています。そのほか面河溪谷の名勝地や六種の登山ルートの距離と所要時間なども紹介してあります。

このマップは、今のところ村内の観光施設やGS等において、無料で配布しており、当地を訪れる観光客の方々にも好評をいただいております。

## 感性の始発駅 ギャラリーしろかわ

城川町

「城川のギャラリーが、なんで子供なの？」よくこのような言葉をかけられます。パンフレットを見ていただければ分かると思いますが、「だから、子供なの」です。

北村西望作「將軍の孫」が、「いらっしやい」とお迎えする当館のメインと

なる第一  
展示室は  
キッズ・  
ギャラリー

ーとなっ  
ており、  
今はオー  
プンを記  
念して、



北村西望作「將軍の孫」

町内の小学三年生から中学三年生の作品四百九十一点をずらり展示しています。毎日・毎分・毎秒ごとに、子供達の数だけあふれ出す、自由自在な発想で描かれた明日へのメッセージでいっぱい。

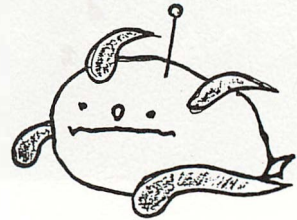
第二展示室は絵画、第三展示室はブロンズ、第四展示室にはガラス工芸と陶磁器、第五展示室は特別展用となっております。こんな山ん中になんでこのような作品があるの」と言われるような巨匠達の作品がいっぱい。マリーローランサン、ノーマンロックウエル、横山大観、梅原龍三郎、ロダン、ドムム、ガレ等々。「いいものはいい」語りかければ作品から答えが」と自信を持ってご招待します。

# えひめ地域づくり研究会議からのお知らせ

この度当研究会議では、「海への手紙事業えひめ'93」を実施することと致しました。

この事業は『豊かな海と人間の共生を求めて今、「えひめ」から発信』しようということで、『青い海への思いを手紙に託し、健やかな〈ふるさと〉を私たちの手で』をテーマに、様々な海への思いを手紙として募集し、文集にまとめあげ発行するもので、自然・生活環境へのやさしさの高揚の一助となればと思っています。併せて「波のオーナーシップ制度」「水クリーン作戦」などの事業も展開していく予定です。

手紙の募集期間や問い合わせ先については、次のとおりです。皆さんのお便りをお待ちしています。



マスコット・キャラクター  
ウェービー

◇募集期間◇ 平成5年11月10日～平成6年6月30日

◇問い合わせ先◇

〒790 愛媛県松山市三番町8丁目234番地

愛媛県生活保健ビル 3階

(財)愛媛県まちづくり総合センター内

『えひめ地域づくり研究会議 海への手紙事業係』

TEL (0899) 32-7750 FAX (0899) 32-7760

## お知らせ

「舞たうん」編集係の一員だった白石まり子さんが、八月三十一日付でセンターを退職しました。



十月一日からセンターの一員となりました中路由加理です。頑張りますので、よろしくお願い致します。



この世で一番幸せそうな微笑みの花嫁さんは、私のシンデレラ・コンプレックスをチクタクとつついた。  
「うらやましい？」そんなことないもん！私には素直な自分へ、おどけてアカンベをしてみました。

\*\*\*\*\*

今回、論談「まちづくり」は、都合により休載いたします。

\*\*\*\*\*

内容についてのご意見や活動内容についての記事など、お気軽にお寄せください。

「舞たうん」編集係

二人のM.S. (中路・川原)まで

〒790 松山市三番町八丁目

一三四番地

愛媛県生活保健ビル三階

(財)愛媛県まちづくり

総合センター

TEL 0899(32)7750

FAX 0899(32)7760

発行・平成五年十月十五日

(財)愛媛県まちづくり

総合センター

えひめ地域づくり研究会議